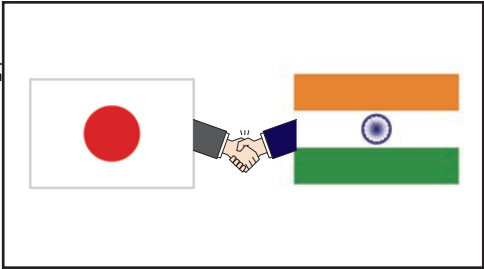


平成27年12月6日 / 阿波観光ホテル

# 「アジアにおける日印関係」 (1990年代以降)

講師 国際政治学者  
堀本 武功 氏

主催：中央大学徳島白門会



12月6日、本誌で「自治随想」を連載中の西川政善氏の「講演会・出版披露&祝賀会」が開催されました。戦後70年を振り返った『地方から見る「日本政治」一考察』の出版を記念した講演「アジアにおける日印関係」が行われ、大勢の来場者が熱心に耳を傾けました。

## はじめに

日本人は意外とインドのことを知りません。インドのGDPは2013年まで世界第9位でしたが、今年は第7位になっています。7～9月の経済成長は世界で最も高い7・4%です。

## インドと日本の関係

インドと日本は、昔から関係を持っていました。中国以外で日本が最も縁のある国はインドです。アメリカとの関係は明治初期頃からですが、インドは1000年を優に越える関係を持っています。

インドには昔から仏教の祖国というイメージがあり、752年には東大寺で盧舎那仏の開眼供養が行われた時に、インドの僧に來日してもらっています。また、日本からは、ローマ法王に会うために天正遣欧少年使節がインド洋を通りましたが、その帰り道でインドに立ち寄っています。



明治時代の日本はコットンで経済発展をしましたが、原綿の大半はインドから輸入していました。戦後は鉄鋼業が盛んでしたが、原綿と同じように鉄鋼石はインド産でした。冷戦時は親しい関係ではありませんでしたが、冷戦後になると、経済と政治の緊密度が急激に進んでいきました。日本から見れば、インドのマーケットや労働人口は魅力的で、さらにインドの位置が地理的に非常に有利です。

ト・技術などが必要になります。インドから見れば、日本はその全てを持っています。インドと日本は6000キロ離れていますが、近い国には脅威を感じるものが有ります。インドの隣は中国ですが、チベット問題の影響もあり、陸続きの中国とは常に緊張状態が続いています。さらに、紛争のあったパキスタンと中国は非常に親しい関係にあります。中国に対抗するためどうしたらいいかを考えたときに、アジアの大国である日本と関係を持つておくことは、インドにとって非常にプラスになります。



## インドの変化

インドは、90年代に入ると東欧政策を始めて、アメリカや中国との関係を改善しようとした。2000年になると、大国になるうとする思考が非常に強くなり、二回目の核実験を行いました。そして、2010年代には経済・軍事大国化が進んでいます。アメリカ・中国以外ではインドだけが大国を指向し、曲がりなりにもグローバルな外交を展開しようとしており、この点が他の中小国と異なっています。

## インドと日本の経済

現在、日本とインドの経済関係は拡大傾向にあります。2014年度の貿易総額は1兆5千億円ですが、日中貿易は32兆円と、まだ中国に比べると非常に限定的です。逆に言えば、日本とインドの貿易は伸び盛りと云えます。



日本のODAは2003年にインドがトップになり、2011年に日印

包括的経済連携協定を結んだことで、貿易量が増えています。

日本は  
ベストパートナー

安倍首相とインドのモディ首相は個人的に親しい関係ですが、中国共産党の対外政策が続く限り、安全保障などの面で、両首相の個人的な関係を越えて、日本とインドの構造的な関係は今後も続いていきます。中国とインドは、表面上は握手しています。しかし、国境沿いではけん制し合っています。中国の経済発展や軍事大国化への歩みは、経済力が弱まってきているので、急に進むことはありません。反対に、インドは労働人口がどんどん増えていて、2030年には世界最大の人口を擁すると言われています。今後、インドと中国の経済格差はどんどん狭まってくると思います。

中国には「一山不容二虎」（一つの山に二頭の虎は必要ない）という考え方があり、アジアには中国という虎が一頭居れば良いと

考えています。

そのような中国から見れば、経済発展するインドは不愉快な存在です。そこで、中国はインドと敵対しているパキスタンを支援しています。インドは中国ともパキスタンとも仲が良くないので、自分の力をつけていくことも重要ですが、それだけでは対抗できません。そして、一方ではアメリカとくつつきたくないと思っているのです、自動的に日本と関係を持つとうとします。このような状況の中で、今後の日本とインドの関係が継続していくことは間違いありません。



労働力の向上

労働人口は増加していますが、労働力の質はまだです。インドでは、本当に質のいい人材は欧米に行ってしまうようです。そのために、例えばトヨタ自動車では、企業内に労働者が自社工場で働く

ときのための職業訓練学校を作っています。さらに、経済自由化を行ったために、外資が入ってきたことで引き抜きが起きていると思います。

インドの経済発展の約半分はIT産業で、情報産業革命で経済成長が進んでいます。モディ首相は労働力の質を上げなければならぬことを認識しているのです、徐々に質は上がっていくと思います。

インドと日本の今後

2013年、中国は東シナ海に防空識別圏を設けました。直ちにアメリカ・日本・韓国が反発しました。インドは、今後インドにとって重要な地点に防空識別圏を設けられることを警戒していました。中国がその4日後に「南アジアに防空識別圏を設ける予定は無い」と宣言すると、それまで沈黙を守っていたインドは「東シナ海の防空識別圏問題については、関係国が平和的に話し合っ解決してほしい」と発表しました。

このように、インドは中国に対して、刺激しないように気を使いながら舵取りする状況になっています。

インドは、日本と中国のどちらか一方を選ぶ必要はありません。軍事的には対中米で日本と協調できるし、中国とは貿易エネルギーで協力できます。インドは一筋縄ではいかず、日本とインドが工業的に深い関係があってもその関係がずっと続いていくとは限りません。

インドの変化

私がインドのある地方の駅へ行ったときのことですが、そこは随分田舎の駅で日に一便だけしか運行しておらず、列車は大体一時間か二時間遅れてやってくるのが当たり前でした。列車に合わせて一時間遅れて到着すると、すでに列車は動き始めていました。駅には私と同じような考えの人が何十人もいて、駅員に「なんで列車が出てい



るんだ」と詰め寄ると、駅員は「あれは昨日の列車です」と答えました。

そんな話があるくらい、インドは変化のゆっくりにした国でしたが、今は状況が変わってきていて、現在のモディ首相が支持されているのも、経済発展を強く望む国民の気持ちの現れと言えます。

リアリスト・インド

現実主義者であるインドとの付き合い方ですが、インドの出方を十分に見極めながら、政策を検討する必要があります。これは政府間だけの話ではなくて、企業間や個人的な関係も同じことです。私もインドに知人がいますが、一度信用すると本音で話ができますが、そこまでいくのは大変です。良い関係の続いている日本とインドですが、日印同盟には至りません。日本でも可能性があるのではという動きがありましたが、現実としては無いというのが現状です。それでも、日印は両国にとって必要な国であることに変わりはありません。